
第一次世界大戦後から 1920 年代前半における トーマス・マンの中国像

高辻 正久

1. はじめに

1924 年に発表されたトーマス・マン (Thomas Mann, 1875-1955) の長編小説『魔の山 (*Der Zauberberg*)』には、中国の文化や中国人を描いている箇所がいくつか見られる。また、その前後に書かれたエッセイや書評においても、マンは中国に関して何箇所か言及している。これに対して、第一次世界大戦 (1914 ~ 1918 年) 以前のマンの著作には、中国に関する記述がほとんど見られない。たとえば、第一次世界大戦中の 1915 年から書き始められ 1918 年に発表された約 600 頁の分量を持つエッセイ『非政治的人間の考察 (*Betrachtungen eines Unpolitischen*)』においても、マンは中国に関してほとんど触れていない¹⁾。トーマス・マンの中国に関する記述は、第一次世界大戦後になぜ増えたのだろうか。マンのアジア像に関する先行研究はいくつかあるが、それらのなかで、アジアと中国を分けて中国のみを対象に考察しているものは、ほとんど無い。マンの中国像に焦点を絞ったおそらく唯一の研究であるギュンター・デボン (Günther Debon) の「トーマス・マンと中国 (*Thomas Mann und China*)」(1990) では、マンの著作における中国に関する記述を、日記や手紙、時代背景等を参照しながら分析している。そして、マンの著作において中国は特別な役割を演じておらず、ときおり否定的な例としての役割さえ演じていると結論づけている²⁾。しかしデボンは、マンの小説における中国人の登場人物については分析していない。また、マンの著作において、中国に関する記述が第一次世界大戦後に増えた要因についても触れていない。

本稿では、第一次世界大戦後にトーマス・マンの著作において、中国に関する記述が増えた要因について探りたい。そのためにまず、20 世紀初頭のドイツにおける中国像に影響を及ぼした可能性のある黄禍論 (*die gelbe Gefahr*) の流布と中

1) 『非政治的人間の考察』においてマンが中国について触れているのは、「中国人のなかで、『偉大な人間は、公の不幸である』という諺が生きている」(Mann 2009: 398) という箇所ぐらいである。

2) Vgl. Debon (1990: 166).

国文学への関心の高まりについて確認する。そして、1920年代前半までのマンの著作や手紙、日記における中国に関する記述を見ていき、マンの中国・中国人に対するイメージと黄禍論・中国文学への関心の高まりとの関連性を調べたい。また、第一次世界大戦前後のマンの中国に関する記述の比較も行う。さらに、マンが1919年6月から熱心に読んだオスヴァルト・シュペングラー (Oswald Spengler, 1880-1936) の主著『西洋の没落 (*Der Untergang des Abendlandes*)』(1918-1922)における中国像とマンの中国に関する記述との比較も行いたい。なお、紙幅の関係上、本稿では1920年代前半までだけを考察の対象とし、それ以降のマンの中国像については、稿を改めて考察する。

2. 20世紀初頭のドイツにおける中国に関する言説

2.1. 欧米諸国における黄禍論の流布

自己にとって何かしら異質な、違和感を与える存在である「他者」の像は、決して客観的事実ではなく、言説によって構築されたものであると言われる³⁾。それでは、トーマス・マンの中国・中国人像の形成に影響を及ぼした可能性のある20世紀初頭のドイツにおける中国に関する言説には、どのようなものがあったらうか。

まず、19世紀末から20世紀初頭にかけて欧米諸国に流布していた、白色人種と黄色人種が経済面および軍事面で相争うことになるという言説、黄禍論 (*die gelbe Gefahr*) について見てみる。黄禍の脅威には経済的な脅威と軍事的な脅威があり、経済的な脅威とは、中国と日本からの低賃金労働者が欧米の白人労働者の職を奪うのではないかという懸念で、軍事的な脅威とは、同じ黄色人種の国家である中国と日本が同盟を結び、欧米の勢力をアジアの植民地から駆逐して、欧米諸国に迫ってくることにに対する懸念だった⁴⁾。当時の欧米諸国にとって黄禍の脅威の中心にあったのは、黄色人種の国家のなかでも特に膨大な人口と資源を有する中国の近代化に対する脅威であった⁵⁾。ドイツでは、皇帝ヴィルヘルム二世 (Wilhelm II, 1859-1941) が19世紀末から黄禍の脅威について積極的に喧伝し

3) 伊藤 (2014: 14-17) を参照。

4) 飯倉 (2004: 9-10) を参照。

5) 飯倉 (2004: 136) を参照。

ていたことに加え、1894 年から 1895 年の日清戦争を境に、中国と日本に対する世論の関心が急速に高まっていた⁶⁾。1900 年に義和団事件が起こり、そして 1904 年に日露戦争が勃発すると、欧米諸国において黄禍論は拡大の頂点に達した⁷⁾。

2.2. 20 世紀初頭ドイツにおける中国文学への関心の高まり

次に、20 世紀初頭のドイツにおける中国文学への関心の高まりについて見てみる。ドイツは 19 世紀後半に中国の抒情詩を、すでに中国研究がひとつの学問に発展していたフランスを通じて知った。特にフランスの中国学者エルヴェ・ド・サン・ドニ (Hervey de Saint-Denys, 1822-1892) による『唐代詩集 (*Poésies de l'époque des Tang*)』(1862) と作家ジュディット・ゴータイエ (Judith Gautier, 1845-1917) による『白玉詩書 (*Le livre de jade*)』(1867) の二つの中国の名詩選は、ドイツにおいて持続的な影響を及ぼしたという⁸⁾。そして、フランス人によるこれらの名詩選をもとに、ドイツの作家ハンス・ハイルマン (Hans Heilmann, 1859-1930) が編訳した『中国抒情詩集 (*Chinesische Lyrik*)』が 1905 年に出版され、さらにドイツの詩人ハンス・ベートゲ (Hans Bethge, 1876-1946) がこのハイルマンによる詩集を翻案した詩集『中国の笛 (*Die chinesische Flöte*)』が 1907 年に出版された。1909 年に作曲されたグスタフ・マーラー (Gustav Mahler, 1860-1911) の交響曲《大地の歌 (*Das Lied von der Erde*)》の歌詞は、このベートゲによる詩集『中国の笛』に基づいている。20 世紀初頭のドイツにおけるこのような中国文学の流行を、水藤は 18 世紀のヨーロッパで流行したシノワズリ (中国趣味) の再燃と言い、マーラーの交響曲《大地の歌》も中国趣味の産物であると指摘している⁹⁾。

3. 第一次世界大戦以前のトーマス・マンの中国に関する記述

それでは、第一次世界大戦以前のマンの著作や手紙には、中国に関する記述が見られるだろうか。第一次世界大戦以前のマンの著作には、上述したように、中国に関する記述はほとんど見られない。一方、第一次世界大戦以前のマンの手紙を見ると、1897 年 4 月 23 日付の友人オットー・グラウトフ (Otto Grautoff, 1876-

6) Vgl. Gollwitzer (1962: 165).

7) Vgl. Gollwitzer (1962: 46).

8) Vgl. Schuster (1977: 90).

9) 水藤 (1997: 275, 278) を参照。

1937) 宛の手紙において、健康のためのアドバイスとして「(規則正しい睡眠は) 中国のすべての茶園から作った汁よりも君 (の健康) に有益だろう」¹⁰⁾ (括弧内筆者) と書かれている。19世紀のヨーロッパ、特に紅茶文化が定着していたイギリスでは、主に中国から茶葉を輸入していた。ドイツには17世紀に中国の茶が伝わったが、日常の飲み物としてビールが根付いていたために、茶の薬用効果のほうに関心が持たれていたという¹¹⁾。当時のマンも茶に対して、飲み物というよりも薬というイメージを持っていたのだろうか。また、1909年4月1日付のマンの兄ハインリヒ・マン (Heinrich Mann, 1871-1950) 宛の手紙には、3月27日に誕生した次男のゴロー・マン (Golo Mann, 1909-1994) について、「ほっそりして、いくらか中国人のようです」¹²⁾ と書いている。ここでは、息子の外見を描写するためだけに中国人に言及している。筆者が調べた限りでは、第一次世界大戦以前のマンの手紙において、これらがほとんど唯一の中国に関する記述であった。第一次世界大戦以前に書かれたマンの手紙には、中国に関する記述がごくわずかしかないことに加え、それらは単なる比喩として言及されているに過ぎない。第一次世界大戦以前のマンの著作や手紙からは、黄禍論や中国文学への関心の高まりとの関連性は見られなかった。

4. 第一次世界大戦後から1920年代前半におけるトーマス・マンの中国に関する記述

4.1. 『魔の山 (Der Zauberberg)』(1924)における中国・中国人像

第一次世界大戦後から1920年代前半におけるトーマス・マンの著作のなかで、まず1924年に発表された長編小説『魔の山 (Der Zauberberg)』における中国・中国人像について見ていく。『魔の山』は、第一次世界大戦の勃発する7年前(1907年)の夏、ハンブルク出身の23歳の青年ハンス・カストルプ (Hans Castorp) が、従兄のヨーアヒム・ツィームセン (Joachim Ziemßen) を見舞うために3週間の予定でスイスのダヴォスにある国際サナトリウム「ベルクホーフ (Berghof)」を訪れたところ、彼も肺を病んでいることがわかり、1914年夏に第一次世界大戦が勃

10) Mann (2002c: 91).

11) 角山 (2017: 23-25) を参照。

12) Mann (2002c: 412).

発するまでの 7 年間そのサナトリウムで療養する間に、さまざまな人物と出会って精神的成長を遂げていくという内容の物語である。

『魔の山』は、マンが 1913 年に執筆を始め、1924 年に完成されるまでに約 12 年を要した作品である。第一次世界大戦中の 1915 年に、エッセイ『非政治的人間の考察』執筆による中断をはさんで、戦後の 1919 年 4 月にマンは執筆を再開するが、この中断の時点までに書かれていたのは第 4 章第 7 節「種々の疑惑と考慮 (*Zweifel und Erwägungen*)」のあたりまでだったと推定されている¹³⁾。『魔の山』の第一次世界大戦後に執筆された部分 (第 4 章第 8 節から第 7 章まで) には、中国の思想文化や中国人の登場人物を描いている箇所がいくつかある。たとえば、ハンス・カストルプの教育者のような役割をするイタリア人の文学者ロドヴィコ・セテムブリーニ (*Lodovico Settembrini*) とユダヤ人のイエズス会士レオ・ナフタ (*Leo Naphta*) との会話において、中国の春秋戦国時代にいたとされる思想家の老子が話題にのぼる場面がある。ある日の散歩で、セテムブリーニはナフタに次のように言う。

「東邦は行動を嫌悪します。老子は、無為は天地間のあらゆるものよりも有益であると教え、すべての人間が行動することをやめたら、地上には完全な平和と幸福とが訪れるだろうと説いています」¹⁴⁾

ヨーロッパ人の理想を理性・分析・行動・進歩と考えるセテムブリーニは、この場面において、老子の「無為自然」の思想を根拠として、アジア人が行動を嫌悪すると断定している。セテムブリーニはこれより以前の場面においても、ハンス・カストルプに対し、アジアについて「無為の平穩を具現している」¹⁵⁾と教えているが、この表現にも老子の思想のイメージがうかがえる。一方、ナフタはセテムブリーニの意見に対して、17 世紀のスペインの神秘家モリノス (*Miguel de Molinos, 1628-1698*) によって唱えられた静寂主義 (*Quietismus*) を例に挙げて、「幸福を静寂のなかに見いだそうとする精神的傾向は、洋の東西を問わず人間に共通

13) 山口 (2013: 46) を参照。

14) Mann (2002a: 568-569). 日本語訳は関・望月 (1988 下: 61) から引用した。

15) Mann (2002a: 240).

なものらしいですね」¹⁶⁾と言う。そして、二人のこの会話を聞いていたハンス・カストルプは、瞑想したり隠棲することについて肯定的な印象を持っていることを述べるが、セテムブリーニから批判される¹⁷⁾。

また、街のホテルで仲間同士お茶を飲んでいる場面において、文学を礼讃するセテムブリーニに対し、ナフタは中国の漢字文化を引き合いに出して彼を揶揄する。

それにたいしてナフタは、シナでは空前絶後のきばつな文字崇拜がおこなわれていて、四万の漢字を墨で書けると元帥になれるそうであるが、これは人文主義者の気持に大いにかなうだろうといい、セテムブリーニをシナに生まれるべき人間であったとあざけたが、セテムブリーニはびくともしなかった¹⁸⁾。

この場面でナフタは、中国における文字文化を強調している。実際、隋の時代から清朝末の1905年まで1300年以上続いた中国の官僚登用試験の科擧では、とりわけ作詩と作文の能力を重視し、文学の才を特別扱いする気運を生じたという¹⁹⁾。

この他に、『魔の山』には中国人の登場人物も出てくる。ハンス・カストルプが療養するサナトリウムの滞在者たちと一緒にトランプゲームのトゥエンティ・ワン (Vingt et un) をする場面において、ドクトル陳富 (Doktor Ting-Fu) という若い中国人男性が参加する。

ほんとうにすばらしい味のブドウ酒にみんなの顔はたちまち赤く、真赤になり、ドクトル陳富の顔だけが依然として黄色く、その黄色い顔に鼠のような目が真黒く糸のように光っていたが、このシナ人はくすくす笑いながらたいへん高額の金を賭けて、あつかましいほど勝ち続けた²⁰⁾。

16) Mann (2002a: 569). 日本語訳は関・望月 (1988 下: 61) から引用した。

17) Vgl. Mann (2002a: 569).

18) Mann (2002a: 790). 日本語訳は関・望月 (1988 下: 312) から引用した。

19) 寺田 (1997: 134-135) を参照。

20) Mann (2002a: 849). 日本語訳は関・望月 (1988 下: 379) から引用した。

この場面において若い中国人男性は、容貌に関しては黄色い顔と細い目が強調された非常にステレオタイプの黄色人種のイメージに描かれているが、性格に関しては遠慮なく大金を勝ち取っていくという強欲な人物として描かれている。ドクトル陳富は、この場面の他にも、サナトリウムの食堂や、また交霊術めいた室内遊戯「こっくりさん」(Glasrükken) を行う集まりに登場する。もともと、この若い中国人男性はあまり台詞がなく、ただくすくす笑っている場合が多く、彼の内面についてはまったく語られていない。たとえば、サナトリウムで療養している女性から秋波をおくられる場面でさえ、くすくす笑っているだけである²¹⁾。このように描かれているドクトル陳富は、「他者化」されているように見える。しかし、マンの小説において中国人が登場するのは、この『魔の山』が初めてである。

『魔の山』と黄禍論との関係について見ると、セテムブリーニが主人公ハンス・カストルプに対し、ヨーロッパ的原理(批判・変革活動)とアジア的原理(停滞・無為の安静)とが世界を支配しようとして争っていると教える場面がある²²⁾。セテムブリーニが示すこの「ヨーロッパ対アジア」という構図は、おおよそ『魔の山』全体の世界観的見取り図と見てよいと田村は指摘している²³⁾。その他にも、「アジアがわれわれを飲み込む」²⁴⁾とセテムブリーニがハンス・カストルプに警告する場面がある。セテムブリーニのこれらの言葉は、黄禍の脅威との類似性が認められる。なお、セテムブリーニのこれらの場面は、マンが『魔の山』の執筆を再開した第一次世界大戦後の 1919 年 4 月以降に書かれたものである。また、上述の若い中国人男性ドクトル陳富が、サナトリウムの滞在者たちと一緒にトランプゲームをやる場面において、ヨーロッパ人たちを相手に笑いながら大金を勝ち取っていく場面も、黄禍の経済的な脅威の縮図のように見える。

『魔の山』と 20 世紀初頭のドイツにおける中国文学への関心の高まりとの関係については、第 6 章第 7 節「雪 (Schnee)」における風景の描写と、グスタフ・マーラーの交響曲《大地の歌》の第 4 楽章「美について (Von der Schönheit)」に

21) Vgl. Mann (2002a: 863).

22) Vgl. Mann (2002a: 240).

23) 田村 (2002: 86) を参照。

24) Mann (2002a: 366).

おける李白の詩に基づく歌詞との類似している箇所が指摘されている。²⁵⁾

4.2. 『ゲーテとトルストイ (Goethe und Tolstoi)』 (1925) における中国への言及

次に、1925年に発表されたエッセイ『ゲーテとトルストイ (Goethe und Tolstoi)』における中国に関する記述を見ていく。このエッセイは、1921年9月4日にリュベックで行われた講演の原稿を大幅に加筆修正したもので、マンはヨハン・ヴォルフガング・フォン・ゲーテ (Johann Wolfgang von Goethe, 1749-1832) とロシアの作家レフ・トルストイ (Lew Tolstoi, 1828-1910) に共通する性格について、フリードリヒ・フォン・シラー (Friedrich von Schiller, 1759-1805) とロシアの作家フョードル・ミハイロヴィチ・ドストエフスキー (Fjodor Michailowitsch Dostojewski, 1821-1881) に共通する性格と比較しながら論じている。

マンのこのエッセイには、トルストイの性格について説明する際に、中国に関して言及している箇所がいくつかある。たとえば、トルストイが興味を持っていた狩猟と決別した理由について、次のように述べている。

晩年のキリスト教的な、もしくは仏教的な、あるいは中国的な平和主義は、いうまでもなく、彼 [トルストイ] に動物の殺生を禁じています²⁶⁾。(括弧内筆者)

晩年のトルストイは、絶対的平和主義者として、一切の条件をつけずに戦争を否定したと言われている²⁷⁾。「キリスト教的な、もしくは仏教的な、あるいは中国的な平和主義」という表現には、マンが中国に対しても、戦争を否定する平和主義の国家というイメージを持っていたことがうかがえる。中国は1895年の日清戦争以後、列強による領土や鉄道敷設などの利権獲得競争によって分割され、マンがこのエッセイを講演した翌年の1922年に、ようやく九カ国条約によって主権尊重と領土保全が約束されるという状態だった。当時のヨーロッパ列強の中国

25) Vgl. Kaewsumrit (2007: 150-151).

26) Mann (2002b: 866). 日本語訳は山崎・高橋 (1992: 102) から引用した。

27) 藤沼 (2020: 221) を参照。

進出に関してマンは、トルストイがヨーロッパ的な進歩の理念を否定していたことの例として、彼の次の言葉を引用している。

「しかし一方には、われわれの一切の進歩の理論に一顧をも与えない、二億の住民をもつ中国がある。それにもかかわらずひとびとは、進歩が人類の一般的法則であることを片時も疑わず、中国人に進歩の理念を教えこむために、大砲や鉄砲をもって押しかけてゆくのである」²⁸⁾

中国に関する記述ではこの他に、マンがトルストイと老子の関係について言及する際に、ロシアの作家マクシム・ゴーリキー (Maxim Gorki, 1868-1936) の回想を引用している箇所がある。

「ありとあらゆる類の人間が、大勢彼 [トルストイ] の部屋に坐しているところを想像していただきたい。[中略] そして誰もが一樣に、うっとりとした眼つきで彼 [トルストイ] をじっとみている。一方、彼 [トルストイ] は皆に老子の教えを説いている……私 [ゴーリキー] も他のひとたちとまったく同じようにいつも彼 [トルストイ] をじっとみつめていた。」²⁹⁾ (括弧内筆者)

もともと、この場面はトルストイの人を引き付ける力を例示している箇所であり、老子の教え自体についてマンは、「説き手がトルストイでなかったならば、この教え [老子の教え] は一般にはきわめて貧弱な興味しか喚び起さなかったにちがいありません」³⁰⁾ (括弧内筆者) と述べている。

4.3. 書評「一冊の美しい本 (*Ein schönes Buch*)」(1922)における老子への言及

マンは1922年に、ハンガリーの作家・映画理論家ベラ・バラージュ (Béla Balázs, 1884-1949) の中国の短編小説『夢の外套 (*Der Mantel der Träume*)』(1922)

28) Mann (2002b: 888). 日本語訳は山崎・高橋 (1992: 137) から引用した。

29) Mann (2002b: 862-863). 日本語訳は山崎・高橋 (1992: 96) から引用した。

30) Mann (2002b: 863). 日本語訳は山崎・高橋 (1992: 96) から引用した。

に対して、「一冊の美しい本 (*Ein schönes Buch*)」というタイトルの短い書評を書いている。『夢の外套』は、オーストリアの画家マリエット・リュディス (Marianne Lydis, 1887-1970) による 20 枚の水彩画の挿絵が付いている絵本で、16 の中国の短編小説が含まれている。

マンはこの作品の書評のなかで、生まれたときにすでに老人だったという中国の伝説をもつ老子³¹⁾について、「年老いた子供 (*das »alte Kind«*)」、すなわち「子供の体は幼いが、精神は年老いている」と表現されている箇所に触れている³²⁾。そして、精神が年老いているのは中国であり、年老いて賢く、また子供らしい人間性の精神をこの作品は深く熟知していると述べている³³⁾。マンの中国に対するイメージを表わしているこの記述からは、彼が中国の特徴と老子の特徴とを結びつけていることがうかがえる。

4.4. 第一次世界大戦後から 1920 年代前半までのマンの手紙・日記の中国に関する記述

次に、第一次世界大戦後から 1920 年代前半におけるマンの手紙および日記を見ると、1919 年 5 月 11 日付の作家イーダ・ボーイ・エド (Ida Boy-Ed, 1852-1928) 宛の手紙には、当時のフランス首相ジョルジュ・クレマンソー (Georges Clemenceau, 1841-1929) について、「モンゴロイド系の細い目をしていて、それゆえもしかすると、血統上ヨーロッパ文化に墓穴を掘り、アジアあるいは混乱のために道を開く使命を授かっているのかもしれませんが³⁴⁾」と書いている。この記述からは、マンがアジア人を、ヨーロッパ文化に悪影響をおよぼす存在と見なしていたことがうかがえる。また、1919 年 6 月 13 日付のベルリン商科大学教授パウル・エルツバッハー (Paul Eltzbacher, 1868-1928) 宛の手紙には、「モンゴル人のような文化破壊³⁵⁾」という表現もあった。これらの記述からは、黄色人種に対するマンの否定的なイメージがうかがえる。そして、13 世紀のモンゴルの大侵攻が、ヨーロッパ人の心にアジア人の勢力伸長に対する恐怖と嫌悪をモンゴルの名

31) Vgl. Kurzke (2002: 336).

32) Vgl. Mann (2002b: 503).

33) Vgl. Mann (2002b: 503).

34) Mann (2004: 289-290).

35) Mann (2004: 295).

と結びつける習性を与えたと言われていること³⁶⁾とともに、黄禍論も想起させられる。

その一方で、第一次世界大戦後から 1920 年代前半におけるマンの手紙・日記には、中国文化に関する記述もいくつかある。たとえば、1921 年 2 月 6 日付の日記では、「今日の午前は、ホールでマーラー《大地の歌》のゲネプロ。感動した」³⁷⁾と書いている。グスタフ・マーラーが 1909 年に作曲した交響曲《大地の歌》は、二人の独唱者（テノール、アルトまたはバリトン）を伴う連作歌曲としての性格を持ち、その歌詞は、中国唐代の詩人、李白・孟浩然・王維らの詩を上述のハンズ・ベートゲが編訳した詩集『中国の笛』（1907）から選ばれている。このような中国唐代の詩を取り入れた作品に対して、マンは「感動した」と書いているが、1922 年 10 月 15 日にベルリンで行った講演『ドイツ共和国について (*Von Deutscher Republik*)』においても、「古代中国の抒情詩と最も発展した西洋の音楽とを融合して有機的人間的統一にした」³⁸⁾と述べて、この作品を称賛している。この他に、1921 年 7 月 5 日付の日記には、マンを訪問した女性美術家の作品について、「彼女の中国風のエキセントリックな版画を先日見た」³⁹⁾と書いているが、「中国風の」という形容詞をここでは肯定的な意味で使っているのかどうかは読みとれない。また、1925 年 8 月 16 日付のマンの長女で女優をしていたエーリカ・マン (Erika Mann, 1905-1969) 宛の手紙には、ドイツの詩人・劇作家クラブント (Klabund, 1890-1928) が中国の戯曲『灰蘭記』を翻案した『白墨の輪 (*Kreidekreis*)』 (1924) に出演する彼女を励ます記述もあった。マンはエーリカに対し、自分はこの戯曲を知らないが、見事に演じることを信じていると書いている⁴⁰⁾。娘の出演に対するマンの期待の大きさがうかがえる一方、クラブントのこの中国の戯曲を翻案した作品に対しては、彼はまだ題名しか知らなかったようだ。とは言え、第一次世界大戦後から 1920 年代前半に書かれた手紙・日記には、中国に関する記述が若干増えていることに加え、肯定的なものにせよ否定的なものにせよ、マン自身の批評もいくらか加わっている。

36) 橋川 (2000: 7-16) を参照。

37) Mann (1979: 483).

38) Mann (2002b: 548).

39) Mann (1979: 536).

40) Vgl. Mann (2011: 182).

5. オスヴァルト・シュペングラー『西洋の没落』における中国像

第一次世界大戦後にトーマス・マンの著作において、中国に関する記述が増えたことが確認できた。言うなれば、20世紀初頭のドイツに広まっていた黄禍論や中国文学への関心の高まりが、第一次世界大戦後になって遅ればせながらマンに影響を与えたと理解することができるだろう。その要因には、何が考えられるだろうか。デボンとはトーマス・マンの中国像の原型として、中国について否定的な判断をしている点において、まずニーチェの影響を挙げている⁴¹⁾。ニーチェは、マンの文学に特に深い影響を与えた一人と言われているが、たとえばニーチェの『悦ばしき知識 (*Die fröhliche Wissenschaft*)』(1882)には、「中国は、雄大な不満と変化の能力が数世紀このかた死に絶えてしまった国の好例である」⁴²⁾という記述がある。確かにマンの『魔の山』や『ゲーテとトルストイ』においても、中国についてこのように「停滞」をイメージさせる記述が見られた。

その一方で、第一次世界大戦後から1920年代前半におけるマンの中国に関する記述には、ドイツの歴史哲学者オスヴァルト・シュペングラー (Oswald Spengler, 1880-1936) の『西洋の没落 (*Der Untergang des Abendlandes*)』(1918-1922)における中国に関する記述との類似点も見られる。『西洋の没落』は、世界の諸文化を有機体として形態学的に観察し、文化は生成・成長・没落の過程をたどるという文化周期の見地から、ヨーロッパ文化はすでに没落の段階に達していると主張したシュペングラーの代表作で、第一次世界大戦後のドイツおよびヨーロッパの危機意識に合致して、大きな反響を呼びベストセラーになった。第一巻は1918年、第二巻は1922年に出版されている。

マンは、1919年6月22日付の日記に「食後に、見たところいくらか私のためになりそうなシュペングラーの『西洋の没落』をぱらぱらとめくって読んだ」⁴³⁾と書いており、また1919年7月5日付の日記には「一日じゅう熱心にシュペングラーの本を読んだ。私はこの本に驚きと賛嘆を感じざるをえない」⁴⁴⁾と書いているように、シュペングラーの『西洋の没落』を熱心に読んでいる。また、1922年10月に行った講演『ドイツ共和国について』においてもこの作品について言

41) Vgl. Debon (1990: 166).

42) Nietzsche (1930: 59). 日本語訳は信太正三 (1993: 96) から引用した。

43) Mann (1979: 271).

44) Mann (1979: 278).

及し⁴⁵⁾、さらに1924年には「シュペングラーの所説について (*Über die Lehre Spenglers*)」というタイトルの書評も執筆している。マンは『西洋の没落』に対して、たとえば上述のマーラーの交響曲《大地の歌》を例に挙げて、諸文化間には根本的な異質性が支配しているというシュペングラーの理論を批判している⁴⁶⁾。しかし、この本におけるエジプト観の影響がのちの長編小説『ヨセフとその兄弟たち (*Joseph und seine Brüder*)』(1933-1943)において見られるように、その受容は続いたと千田は指摘している⁴⁷⁾。

注目すべきなのは、シュペングラーの『西洋の没落』には、中国に関する記述も少なからず見られることである。そのなかでも、老子の思想の根幹にある「道 (Tao)」に関するものが比較的多い。老子の「道」とは、蜂屋邦夫によれば、「天地自然の生成や活動の原理、人間もそれに同化して一体となるべきもの」⁴⁸⁾であるという。『西洋の没落』においては、たとえば「『道』という翻訳することのできない中国の本質の根本概念は、ただ深い歴史感だけからのみ解釈されるべきである」⁴⁹⁾、「『道』という、すっかり深さの方向の意味に感ぜられた原理を持つ、中国文化」⁵⁰⁾という記述がある。これらの記述からは、シュペングラーが中国文化と「道」との関係の深さを強調していることがうかがえる。この点に関してマンは、上述したように、1922年の書評「一冊の美しい本」において、老子の特徴と中国の特徴とを結びつけていた。また、『西洋の没落』には、「『道』は、自然の技術的な征服という考えからははるかに遠い」⁵¹⁾という記述もあるが、これは一切の人為を否定した老子の「無為自然」の思想を表わしている。マンが1924年に発表した『魔の山』においては、上述したように、セテムブリーニがこの老子の「無為自然」の思想について幾度か言及していた。彼はこの思想を、アジアの特徴と結びつけていた。さらに、マンが1925年に発表したエッセイ『ゲーテとトルストイ』においても、上述したように、老子について言及されている。このように、シュペングラーの『西洋の没落』を読み始めた1919年6月以降のマンの著作に

45) Vgl. Mann (2002b: 546-548).

46) Vgl. Mann (2002b: 738-739).

47) 千田 (1999: 145-146) を参照。

48) 蜂屋 (2008: 386)。

49) Spengler (1923: 19). 日本語訳は村松正俊 (2015(一): 41) から引用した。

50) Spengler (1923: 246). 日本語訳は村松正俊 (2015(一): 269) から引用した。

51) Spengler (1922: 352-353). 日本語訳は村松正俊 (2015(二): 361) から引用した。

において、老子に関する記述が見られるようになる。

6. 第一次世界大戦後のトーマス・マンの中国への関心拡大の要因

以上、1920年代前半までのトーマス・マンの中国像について、彼の著作および手紙、日記をもとに探ってみた。これらのなかに中国に関する記述は非常に少なかったが、第一次世界大戦終了を境に、マンの中国に対する関心がいくらか高まっていることがうかがえた。そのきっかけがあるとすれば、それはシュペングラーの『西洋の没落』なのではないだろうか。1920年代前半においてマンが中国に関して記述する際に、老子と「無為自然」の思想について言及することが比較的多い点において、シュペングラーの『西洋の没落』における中国に関する記述との類似点が見られた。マンの著作において老子に関する記述が見られるのは、彼が『西洋の没落』を読み始めた1919年6月以降であることを考えても、この点についてはシュペングラーの影響を多かれ少なかれ受けたのではないだろうか。

第一次世界大戦後から1920年代前半におけるマンの著作や手紙・日記には、20世紀初頭のドイツにおける黄禍論の流布や中国文学への関心の高まりの影響を受けたように思われる記述もいくつかあった。しかし、欧米諸国において黄禍論が拡大の頂点に達したのは日露戦争が勃発した1904年頃であり、中国文学の翻訳も第一次世界大戦以前の1900年代にはすでにドイツにおいて行われていたので、これらの言説や流行に対するマンの反応は、彼の著作や手紙、日記を見る限り、少し遅いといえる。また、1925年に発表されたエッセイ『ゲーテとトルストイ』においてマンは、上述したように、トルストイの性格を説明する際に幾度か中国に関することを言及しているが、第一次世界大戦中に書かれたエッセイ『非政治的人間の考察』（1918）においては、トルストイについても少なからず言及しているにもかかわらず、それらのなかに中国に関する記述は見られなかった。これらのことは、マンが第一次世界大戦以前に中国に対して、それほど関心を持っていなかったことを裏付けているとも考えられる。

マンと黄禍論との関係を考えると、第一次世界大戦後から1920年代前半における彼の著作や手紙には、確かに黄禍論の考えに類似した記述や表現が見られた。しかし、第一次世界大戦以前のドイツ帝国時代には、マンは黄禍をそれほど脅威と思わなかったのではないだろうか。たとえば、1895年の三国干渉による日本に

対する遼東半島の清国への返還勧告や、1898 年の膠州湾租借（期限 99 カ年）等を考えると、19 世紀末から第一次世界大戦前のドイツは、中国や日本に対して優位な立場だったといえる。しかし、第一次世界大戦において、膠州湾およびドイツ領南洋諸島を日本に占領される。黄禍論に対するマンの関心が第一次世界大戦後に高まったとすれば、中国や日本に対するドイツの優位が崩れたことこそが要因ではないだろうか。

参考文献

一次文献

- Mann, Thomas (2002a) : *Der Zauberberg*. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (2009) : *Betrachtungen eines Unpolitischen*. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (2002b) : *Essays II 1914-1926*. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (2002c) : *Briefe I 1889-1913*. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (2004) : *Briefe II 1914-1923*. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (2011) : *Briefe III 1924-1932*. Frankfurt am Main: Fischer.
- Mann, Thomas (1979) : *Tagebücher 1918-1921*. Frankfurt am Main: Fischer.
- Nietzsche, Friedrich (1930) : *Friedrich Nietzsche Werke Bd.3*. Leipzig: Alfred Kröner.
- Spengler, Oswald (1923) : *Der Untergang des Abendlandes Bd.1*. München: C.H. Beck.
- Spengler, Oswald (1922) : *Der Untergang des Abendlandes Bd.2*. München: C.H. Beck.
- マン、トーマス (1988) 『魔の山 (上) (下)』 (関泰祐・望月市恵訳) 岩波文庫。
- マン、トーマス (1969-1971) 『非政治的人間の考察 (上) (中) (下)』 (前田敬作・山口知三訳) 筑摩叢書。
- マン、トーマス (2016) 『トーマス・マン日記 1918-1921』 (森川俊夫・伊藤暢章・洲崎恵三・前田良三訳) 紀伊國屋書店。
- マン、トーマス (1992) 『ゲーテとトルストイ』 (山崎章甫・高橋重臣訳) 岩波文庫。
- シュペングラー、オスヴァルト (2015) 『西洋の没落 (一) (二)』 (村松正俊訳) 五月書房。
- ニーチェ、フリードリヒ (1993) 『悦ばしき知識』 (信太正三訳) ちくま学芸文庫。

二次文献

- Debon, Günther (1990) : Thomas Mann und China. In: Eckhard Heftrich / Hans Wysling

- (Hrsg.) : *Thomas Mann Jahrbuch*. Frankfurt am Main: Vittorio Klostermann, S. 149-174.
- Gollwitzer, Heinz (1962) : *Die gelbe Gefahr. Geschichte eines Schlagworts, Studien zum imperialistischen Denken*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht.
- Kaewsumrit, Aratee (2007): *Asienbild und Asienmotiv bei Thomas Mann*. Frankfurt a. M.: Peter Lang.
- Kurzke, Hermann (2002) : *Essays II 1914-1926 Kommentar*. Frankfurt am Main: Fischer.
- Schuster, Ingrid (1977) : *China und Japan in der deutschen Literatur 1890-1925*. Bern.: Francke.
- 飯倉章 (2004) 『イエロー・ペリルの神話 — 帝国日本と「黄禍」の逆説』彩流社。
- 伊藤白 (2014) 『トーマス・マンの女性像 — 自己像と他者イメージのあいだで』彩流社。
- ゴルヴィツァー、ハインツ (2010) 『黄禍論とは何か — その不安の招待』(瀬野文 教訳) 中公文庫。
- 水藤龍彦 (1997) 「二十世紀初頭のドイツ文学に見る〈China〉(その一)」追手門学院大学『創立三十周年記念論集 文学部篇』、269 ~ 280 ページ。
- 田村和彦 (2002) 『魔法の山に登る — トーマス・マンと身体』関西学院大学出版会。
- 千田まや (1999) 「トーマス・マンとシュペングラー (一) - 「文化」と「文明」を中心に -」和歌山大学『教育学部紀要 人文科学』第 49 集、143 ~ 159 ページ。
- 角山栄 (2017) 『茶の世界史』中公新書。
- 寺田隆信 (1997) 『物語 中国の歴史』中公新書。
- 橋川文三 (2000) 『黄禍物語』岩波現代文庫。
- 蜂屋邦夫訳注 (2008) 『老子』岩波文庫。
- 藤沼貴 (2020) 『トルストイの生涯』第三文明選書。
- 山口知三 (2013) 『激動のなかを書きぬく — 20 世紀前半のドイツの作家たち』鳥影社。

(たかつじ・まさひさ 学習院大学研究生)

Thomas Manns China-Bild vom Ende des Ersten Weltkrieges bis Mitte der 1920er Jahre

Masahisa Takatsuji

In Thomas Manns Roman *Der Zauberberg*, der im Jahre 1924 veröffentlicht wurde, gibt es einige Szenen, die die Kultur Chinas und einen Chinesen beschreiben. Auch in seinen Essays und Rezensionen, die in der ersten Hälfte der 1920er Jahre veröffentlicht wurden, erwähnt Mann China und spricht beispielsweise über Laotse. Dagegen gibt es sehr wenige Beschreibungen von China in Thomas Manns Werken, die vor dem Ersten Weltkrieg veröffentlicht wurden. Warum gab es vermehrt Erwähnungen Chinas in seinen Werken nach dem Ersten Weltkrieg? Dafür sollen einige Gründe genannt werden.

Was für Vorstellungen von China, die Thomas Manns China-Bild beeinflussen konnten, gab es am Anfang des 20. Jahrhunderts in Deutschland? Erstens gab es die Vorstellung von der „gelben Gefahr“, die in Europa und Amerika vom Ende des 19. Jahrhunderts bis zu Anfang des 20. Jahrhunderts verbreitet war. Die Bedrohung durch die „gelbe Gefahr“ umfasste wirtschaftliche und militärische Aspekte. Die Europäer und Amerikaner fürchteten, dass die große Bevölkerung in China und seine Niedriglöhne ihnen Arbeitsplätze wegnehmen würden. Sie fürchteten auch, dass China und Japan ein Bündnis schließen könnten, um Europa und Amerika anzugreifen. Zweitens könnte die Wertschätzung der chinesischen Literatur am Anfang des 20. Jahrhunderts in Deutschland Thomas Mann beeinflusst haben. Damals erschienen dort viele Übersetzungen und Nachdichtungen der chinesischen Lyrik und Prosa. Man könnte dieses Phänomen der Chinamode als die Wiederkehr der Chinoiserie aus dem 18. Jahrhundert ansehen.

Zuerst betrachte ich Thomas Manns Werke und Briefe vor dem Ersten Weltkrieg. Es gibt sehr wenige Erwähnungen Chinas in seinen Werken und Briefen vor dem Ersten Weltkrieg. China wird hier oft nur als Gleichnis benutzt. So schreibt beispielsweise Mann in seinem Brief vom 1. April 1909, dass sein kleiner Sohn schlank und etwas chinesischafter

sei.

Als Nächstes betrachte ich Thomas Manns Werke, Briefe und Tagebücher vom Ende des Ersten Weltkrieges bis Mitte der 1920er Jahre. Im *Zauberberg* (1924) unterhält sich Lodovico Settembrini, der eine pädagogische Rolle für Hans Castorp spielt, mit Leo Naphta über Laotse und seine Lehre. In einer anderen Szene redet Naphta über die Vergötterung der Schriftzeichen in China. Außerdem tritt in diesem Roman Doktor Ting-Fu, ein junger Chinese, auf. Im *Zauberberg* gibt es einige Szenen, die auf die „gelbe Gefahr“ hindeuten. Settembrini behauptet, dass Asien Europa verschlingen würde. Weiter gewinnt Doktor Ting-Fu, ein junger Chinese, kichernd viel Geld, als die Patienten im Sanatorium ein Kartenspiel spielen. Außerdem schreibt Mann in seinem Brief vom 11. Mai 1919, dass das Mannsbild, das Schlitzaugen habe, vielleicht von Blutes wegen berufen sei, der abendländischen Kultur das Grab zu schaufeln und Asien den Weg zu bereiten. Im Essay *Goethe und Tolstoi* (1925) schreibt Mann über China und Laotse im Zusammenhang mit seiner Darstellung des Charakters von Lew Tolstoi. 1922 bespricht Mann das neu erschienene Buch von Béla Balázs *Der Mantel der Träume*, das sechzehn chinesische Novellen enthält. Dort betont er die Verbindung zwischen China und Laotse. Außerdem schreibt Mann am 6. Februar 1921 in sein Tagebuch, dass Gustav Mahlers *Das Lied von der Erde*, dem die Nachdichtung eines chinesischen Gedichts von Hans Bethge zugrunde liegt, ihn ergriffen habe. In seiner Rede *Von Deutscher Republik* am 15. Oktober 1922 sagt er, dass Mahlers Werk die altchinesische Lyrik mit der entwickeltsten Tonkunst des Abendlandes zu einer organischen menschlichen Einheit verschmolzen habe.

Ich erkenne auch Ähnlichkeiten zwischen Thomas Manns Bild von China in der ersten Hälfte der 1920er Jahren und Oswald Spenglers Bild von China in seinem kulturphilosophischen Buch *Der Untergang des Abendlandes* (1918-1922). Mann las *Der Untergang des Abendlandes* eifrig seit 1919 und schrieb sogar die Rezension von diesem Buch im Jahre 1924. Mann und Spengler betonten beide die Verbindung zwischen China und dem Taoismus. Seit Mann *Der Untergang des Abendlandes* las, erwähnt er in seinen Werken auch Laotse.

Die Vorstellung von der „gelben Gefahr“ und die Mode der chinesischen Literatur am Anfang des 20. Jahrhunderts könnten Thomas Manns Interesse an China und sein Bild

von China beeinflusst haben. Allerdings war dieser Einfluss auf seine Werke relativ spät. Dies bestätigt, dass Mann vor dem Ersten Weltkrieg nur ein geringes Interesse an China hatte. Er könnte vermutlich vor dem Ersten Weltkrieg noch nicht an die „gelbe Gefahr“ gedacht haben, weil er das Deutsche Reich gegenüber China und Japan als viel mächtiger eingeschätzt haben könnte. Und ich denke vom Standpunkt des Zeitabstandes aus, dass Spenglers *Der Untergang des Abendlandes* Thomas Manns Interesse an China und sein Bild von China stärker beeinflusst haben könnte.

